
3つの祝福

シェング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3つの祝福

【Nコード】

N0753I

【作者名】

シェング

【あらすじ】

空がないこの世界で人は一体何を思うだろうか——そのことについて飛翔は苦悩する・・・

古代から——人は科学を使いすべてのものを発展させてきた。火から始まった人類の発展。それに伴い自分たちの住みやすいようにと、全てを思い通りに変えてきた。発展は名誉とされ、進展は賞賛された。人々はこぞって我先にと研究に没頭した。そのことが人類にとつては便利なものだったのだろう。幸いにもこの蒼き星「地球」にはそれだけのものがそろっていたからだ。研究に必要な木々、人材、そして環境。何を取ってもこの星より素晴らしい星々はないだろう。それがすべての間違いだった。人はこの星に甘えすぎた。その結果が環境汚染。木々は伐採され、必要最低限のものさえ残していれば大丈夫だとタカをくくっていた。空気は汚れ、地球は壊れていった。そう……破滅に向かっている。そして人々は——現代に到る。

祖父ちゃんから話を聞いたことがあった。この世界には空があるってことを。俺はまだ空を見たことなんてない。いや、親父だつて見たことない。みんなは疑問に思わないのだろうか。ここが本当の世界だなんて。人々はもともとこの場所に住んでいた。それは本当なんだろうか。

「飛翔つばさ！この問題をやってみる！」

仕方ないから画面を見る。くそ、こんな授業やつてられねえよ。乱雑にキーボードを叩いて、答えを提示する。答えは……正解。まあ当然だけだな。

「飛翔君、今の問題難しくなかったの」

隣の友達が話しかけてくる。たいてい俺自身は考え事をしているから、スルーする。それで、俺に話しかけてくるやつはいなくなつた。この人懐っこい、こいつだけを除いて。

「今のくらいなら楽勝だ」

そっけなく返す。こいつはもう十八にもなるつてのに、子供臭さが残っていやがる。まあ、でもだからこそ、そんなに遠ざけられないだけだな。こいつといて楽しいってのはあるかもしれない。理屈がないやつとしゃべるのは、俺としてもいい判断材料だ。

「お前……今この状況をどう思う」

「あ、あの、飛翔君……」

案の定何も分かってねえ……突拍子もない質問だから仕方ないか。

「ああ、わかりやすく言つてやる。この場所どう思う」

目を丸くしている。あまりにも予想外の質問だったのだろう。少し考えてからやっとわかったという感じでしゃべりだした。

「ここは大きくて、生活には困らない場所だね。でも……本当は違うはず。大人たちが言うことは間違っていると思うんだ」

意外だった。俺以外の奴がこういう思考を持っていることを。大人たちはここが本当だと言っている。リアルな世界だと。

「意外だった、お前からそんな言葉が返ってくるだなんてな」

少しうつむいている。ったく、これだからこいつの相手は面倒だじゃあな。といって足早に自分の家に向かった。その途中に公園があった。その公園のブランコで少しの間、集中しながら漕いだ。気持ちが落ち着かない。仕方がないのだろうけど。

そして決意した。今日こそは聞こう。親父にこの世界は本物なのかと。家に着くなり、親父の姿を確認して、問いかけた。

「お、親父！」

「なんだ」

胸がドキドキする。心臓の鼓動が全身に伝わって、喉から声が出ない。

「ここは……この世界は本物なのか……」

空気が凍ったような気がした。冷や汗が背を伝う。寒い。寒い。

「その話は二度とするな」

けど……そう言いかけて、親父の表情を見ると険しくなってい

た。有無を言わさぬ眼光で睨んでくる。畜生、ビビッてしまった。何もいえずに自分の部屋に戻る。これで結局何も分らないじゃないか。くそつ。

夜が更けていく。空つてのは綺麗で広大だ。人さまが何をやって、空は支配できん。自由な風景を描いて、皆に楽しみを与えるのが空だ。眺めて楽しめ。泳いで楽しめ。と祖父ちゃんが言っていたのを思い出す。小さいころだったからあまり覚えていないけど、この言葉だけは覚えていた。祖父ちゃんの名前は大地。地に根をはって、お前たちがどこにでも飛んで行くように俺は土台を作るんだ。と言っていた。親父の名前は翔。空に飛ぶためにつけられた名前なんだろうきつと。それで親父は飛べなかった。いや、飛べなかったのかもしれない。だから俺に飛翔と名付けたんだろう。祖父ちゃんの影響力が強いと思うんだけどな。

「ははっ」

思わず声が漏れる。だって楽しかったんだもんよ。なんで、なんで祖父ちゃん……いなくなっちゃったんだよ。気づいたら涙が頬を伝っていた。袖で拭う。こんな格好悪いところなんて誰にも見られたくはない。

そうだ。祖父ちゃんの部屋を見ればいいんだ。どうして今まで気付かなかったんだ。空のことは誰にもばれないように研究していたけど、学校の図書館は使えない。たいてい空に関する話はSFやオカルトになっている。そして肝心なものがすでに廃棄されていると言ってもいいだろう。PCの検索でも乗らないし、データ自体が隠ぺいされていると思っている。どうにもその部分だけすっぱり抜け落ちていくからだ。

ずっと、ずっと祖父ちゃんの部屋には入らなかった。絶対に戻ってくると思っていた。だから部屋は綺麗にしていたし、いつでもおかえりと言ってあげたかった。でも戻ってこない。大好きな祖父ちゃんは今も。

そのかわり、俺は祖父ちゃんの遺志を継いで空を見る。そう誓う。

なあ祖父ちゃん。俺は祖父ちゃんの代わりに、みんなにでっかい空を伝えるよ。だからごめんな。

そう誓って部屋を漁る。机の中、本だな、床、絨毯の下、ベッドの下……手がかりになるようなものがない。これ以上音を出すと親父に気づかれそう。今日はやめておこう。視界も悪すぎる。自分の部屋に戻り布団をかぶり、少し湿っている枕で寝た。

朝のライトがまぶしい。昨日は疲れていたせいか、すぐに眠っていたようだ。そろそろ学校の時間だが、今日は休む。そう決めた。今日一日で祖父ちゃんの部屋を探し回る。必ず見つけて、俺は空を見るんだ。どこかの収容所に閉じ込められている生活は嫌いだ。でもそれにもまして、騙され続けられているというのが一番気に入らなかった。そんなことは許したくはない。祖父ちゃんの部屋に入る。この部屋を掃除しているのは俺だ。昨日のままで少し汚かった。

タイムリミットは親父が帰ってくるまで。母さんには少し作業があるから入らないでね、と言っておいた。急がないと帰ってくる。

探す。探す。さがす。昨日と同じように何も見つからない。時計の針は十二時を回っている。起きたのが七時だから、あれから約五時間は探し回っていたのだろう。それでも見つからない。とりあえず先ほど見つけたアルバムをめくる。祖父ちゃんとの思い出がたっぷり詰まったアルバム。懐かしんでついつい眺めてしまう。古き良き時代ってこういう時に使う言葉なのかなとか思いつつページをめくる。大体は家族みんなで写っている写真ばかり。祖父ちゃんの隣で小さい時の俺が笑っている。なんだか恥ずかしいぜ。

小一時間が過ぎた。やっとアルバムも最後のほうに差し掛かった。
「ん……？」

見たことのない場所だ。この家でないことは明らかである。少し暗い。こんなに暗い場所を見たことがなかったし、後ろの方に、およそ古い機械が置いてある。いや、機械ではない。あれはもっと物理的なもので……自分の手でやるもの。ああ、教科書にでも書いて

あったシャベルってやつか。シャベルなんて一体何に使っただろうか。ガーデニングなら専用の機械があるし、人工的に綺麗な景色はいくらでも作ることはできる。おかしい。無駄なことは祖父ちゃんがするわけがない。でも、ここはどこだろう。それがわからないと確かめようもないし、何もできない。親父に見せるなど言語道断だろう。絶対に怒りやがる。また手詰まりか。手掛かりが見つかるとすぐに新しい壁が出てきやがる……腹が煮えくり変えそつだ。宿題程度でつまづいたことは一度もない。もちろんテストでも。初めて襲ってくる感覚と言うものが案外厄介であることに今日初めて気づいた。

この世界は鳥かこのようで、そして甘いんだ。挫折をしない人間は強くはなれない。この快適な空間では全てが科学で解決してしまうからだろうな、きっと。

仕方ない。今日はやめだ。その写真を抜き取り、出したものを片づけ自分の部屋に戻ってその写真を見つめた。記憶がなかった頃に連れられた場所。この時ばかりは記憶がない頃が恨めしい。ごろごろしながら手がかりを見つめる。PCで検索もするが相変わらずヒットすることはない。八時を回った頃に、思わぬ来訪者が現れた。

「飛翔……君。こんばんは……」

「何しに来たんだよ」

こんな時間に訪ねてくるのだから、何もないなんて考えにくい。

何かがあったんだと思う。だが、相手が相手だからなあ。少しため息が出る。

「で、どうしたんだ」

「あの、その……」

こいつが説明するにはこういうことだ。空に関して調べていたところ、後ろからうるさいやつらに見られて、ついつい言ってしまったということだ。それを運悪く教師が見ていて、明日職員室にこいと。そしてこいつはこっぴどく怒られた後だということを。よく見ると目が赤くなっている。情けない顔がさらに増している。

「気にするな。たかが教師だ」

教師なんて怖くはない。権力を手に入れただけの人間だからだ。人としての重みがないものなんて飾りと同じに過ぎない。何を言われても感じない。

「そうだ……！」

本当は人には見せたくないものだが、こいつなら他の奴らよりは若干信頼できる。あくまで若干だということは心で付け足しておこう。

わずかばかりの希望を抱いて、あの写真をこいつに見せた。じっくり見て考えている。いつになく真剣なまなざしで見つめている。珍しい。こいつがこんなにも本気なるだなんて予想すらしていなかった。そして静かに口を開いた。

「この写真……僕は知っている」

「なんだって！」

胸が躍った。この場で踊りたくなるような感情を押し殺し、話を聞くことにした。おもむろに胸のポケットから一枚の写真を渡して俺に見せた。

「これは……シャベル……」

そう。これは俺の祖父ちゃんの写っていた写真と似ている。場所も少し薄暗いのも共通しているし、何よりもこのシャベルが証拠だ。ならこの場所を探せば何かわかるかもしれない。

「この場所はわかつているのか」

「正確な位置まではわからない……けど」

こいつが言うには、ここは地下だと。じいちゃんが言っていたことを符合するとここは地底だ。この地の底が一番深い場所じゃないのか……

「今日は遅いからもう帰っておきな」

「うん。それじゃあね飛翔君」

いろいろなことがありすぎる一日だった。だからこそ家に返させた。少しの間だけ一人で考える時間がほしかったから。

思考をまとめるために紙に書き留める。ここは地の底であり、人たちは隠している。ここよりも深い場所があり、それを知っているものは少ない。祖父ちゃんが目指していたものはきっとそこにあるんだ。

てがかりはここより深いところにある。ここ自体が深いはずなのに、ここより深い場所は難しいな。探すのはまた明日だ。もう寝よう。布団の中に入ると睡魔が顔を出してきた。いやおうなしに眠りに引きずり込まれた。

そして、朝はいつもどおり人工的なライトで目が覚める。朝食をとりいつもどおり学校に行くことにした。授業中に過去の事件について調べた。歴史に載っていないくとも、事件ならあるかもしれない。そう思っ探したのだが見た記事には当たり障りのないことしか書いていない。かなり残念だ。

「飛翔君ちよつといいかな」

権力を笠に着た連中が話しかけてくる。面倒だ。調べていたものを仕舞い、一応耳を傾ける。

「昨日噂を聞いてね。君がいろいろ考えているとかなんだとか」

なんて回りくどいんだ。単刀直入に言ってほしいものだ。おまえは今この場所に疑問を思っているのだろう、と。

「先生方はそんなことを信じているんですか」

「だがな……」

「その噂は嘘ですよ。誰かが僕を貶めたいだけなんでしょう」

「しかし、証拠は……」

しつこい。それでも俺は自他ともに認める優等生だ。だが、ここで怒ってはいけない。いなすように、すかさずに話さなければ。

「やだなあ、僕みたいな優等生がそんな無駄なことをするわけないでしょう」

うむ、と言って渋々下がっていく。確定した証拠がないのだから、手の出しようもないのだろう。しかしこれのおかげで今までの疑問に対しての霧が晴れた。教師たちが俺に問いつめるってことは、必

ず秘密があるんだと。必ずそれを暴く。そして俺は空をつかむんだ。この手で。

有益なことを考えている時間ってのはたいてい早く過ぎるもんだ。今日は少し寄り道してみた。今までの帰り道では何も見つからないのだから、少しくらい変化をつけてもいい。

「ここは……」

俺が小さいときによく遊んだ公園だった。もう公園自体が廃れている。どこかのマナーが悪いやつらのと、時間のせいだろう。たばこの吸い殻や錆がよく目立っている。おかしい。何かがおかしい。何で俺はここで遊んでいるんだと。小さい時の記憶はこじかない。祖父ちゃんときたのはこの公園だ。なぜだ。

なぜ自分の家の近くの公園に向かわないのだろう。答えは一つしかない。ここじゃなきゃダメな理由があるんだ。その理由は一つしかない。そう、祖父ちゃんは夢のためにここにきていたんだ。人が辺りにいないことを確認して、探す。水の通っていない蛇口をひねってみる。何も無い。滑り台の下をくぐってみる。何も起きない。

「開けゴマー！」

反応するわけがない。くそ、なにもない。仕方なしに、椅子に腰をかける。長い時間放置され、腐敗している前時代の木の椅子。いきなり未成年とはいえ発達した男が乗ると――

いてえ！後ろにひっくり返って、椅子が時間の波にのまれるように、一瞬にして、ひとつの木々へと戻っていった。

「なんなんだよっ！」

正直苛立っていた。何も見つからないわ、椅子は壊れるわで踏んだり蹴ったりだ。壊れた椅子の破片を蹴っ飛ばした。その後は砂を思い切り蹴った。砂埃が舞い上がって、口の中に入る。気持ち悪い……砂埃が舞い上がった……そうか。

そうだったのか。一面は固い土質で、砂埃が舞い上がるようなものではなかった。だが、この椅子の下だけは違う土質でできている。手が汚くなるのを承知で、手で砂を掘ると、固い鉄のようなものを

見つけた。もう少し掘ると、手をかけるところも見つけた。思い切り引つ張つてみると、砂が避けるように流れていき、地下への階段を見つけた。扉を閉め暗闇の中、携帯のライトを頼りに進んでいく。階段が途切れた場所には、恐らく前時代のものと思われるものがほこりをかぶつて眠っていた。歩くだけで埃が舞い飛ぶ。結構汚い場所だ。なめるように辺りを見渡す。見ている中で視線があるものにくぎ付けになった。そう、あのシャベルを見つけた。写真と見比べると確かにそうだ。その奥には扉があった。錆びついていて、扉を開く音が鈍くこの部屋に響く。奥は、埃臭いというよりは土臭かった。

これはトンネルだ……高速道路とかではよく見るようなものである。恐る恐る、進んでいく。緊張と好奇心が交差しながら進む。確実に進んでいる。そして、昇る階段に差し掛かった。

長かった。だいぶ歩くのに時間と体力を使っているだろう。だけど、俺は歩くのを一時もやめたりはしなかった。

「ここは……」

外の世界とつながっていた。ただ、広がる風景だけがまぶしかった。透き通るような、それでいて、広大な空が目に入った。そして海も。母なる海はとても静かに、だがとても深く深い美しさを持っていた。そして何よりも天空の覇者がいた。空をバックに轟々と光り輝いている星。太陽の姿は圧巻だった。まともに直視することさえ許すことはない。

「祖父ちゃんの言っていたことは本当だった！本当だったんだ！」

誰もいないが、海に向かって叫ぶ。地上は綺麗だったとしか言いようがない。陳腐な言葉だがこれが一番伝わるのだろう。誰に伝えるわけでもないが。嬉しくて、嬉しくて、涙が止まらなかった。ひとと仕切泣いて、どこまでも広がっている空を堪能した後に一つの疑問が湧いてきた。——なぜこの美しい景色を皆に見せないのか。なぜ、嘘をついてまで地底にいるのだろうか。後者の疑問はこの美しいものを護りたいから。という理由でも納得はできるが、なぜ隠す

のだろうか。これだけの科学が発達したのならば護っていくのは簡単なことではないのだろうか。

いや、だからこそ——なのか。科学の発達した末にあるのは滅びのみ。今は地球を護るために地底に身を隠したんじゃないんだろうか。科学は地上には干渉しないと、誓いを立てたのではないのだろうか。

そう考え、この純粋な地上を護るために自分のもといた場所に帰ろうとした。最後に、この美しい風景を目に刻みつけるために後ろを振り返った。そして、おそらくこの地上で眠っている祖父ちゃんへの決別をこめて、じゃあな祖父ちゃん。と一言だけを残して、ここへ続く扉を閉ざすことにした。祖父ちゃんの夢はかなって、俺の夢も果たした。

その後、家に帰り俺はあの景色のことを、書物に書き残した。

——あれから数十年。地上を体験した著者の書かれていたものは、こう書いてあった。

地上は美しいものである。

地底のものが護っていくんだ。

地上には、広大な空。汚れ無き海。そして、巨大な天空の覇者である太陽がある。

我々にできることは、手助けのみである。

ともに見守っていこう。

そして、われわれの技術が必要になるときが来る。と書かれてあった。

その本に記されていたことを、少年は忠実に守りぬいた。この書物を読んだ少年は地上へ向かい、そこで人間らしき生物に出会う。そして火をおこす方法を教え、人類の発達の手段を授けた。そして人類という種族は進化を繰り返していくのは、また別の話である。

（後書き）

最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。この話は部誌に掲載している話です。ご了承ください。

私のサイトです。興味がちよつとでも湧いたなら来ていただけると有り難いです。

<http://shengnovel.blogspot.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753i/>

3つの祝福

2010年10月8日15時12分発行